



2017年1月11日放送

印象に残る症例①

長崎大学 産婦人科学教室 助教 **増崎 雅子**

私は長崎大学病院に勤務する産婦人科の医師で医師になって30年になりますが、漢方を学び始めたのは7年前からです。学生時代に漢方を学ぶ機会はありませんでしたし、産婦人科で漢方を使う場面といえば、妊婦の感冒に葛根湯を処方するぐらいでした。そんな私が漢方の効能に驚き、現代医薬品の代替品としてではなく、一つの独立した治療のツールとして漢方を認識するようになった、そんな患者さんを紹介したいと思います。

漢方には「気血水」という概念があります。これは、体の機能を調整する成分として「気」と「血」と「水」の3つがあり、これに異常をきたすと病気になるという漢方の病因論の一つです。今日はその中の一つ「水」に異常をきたした患者さんに漢方治療を行った経験を紹介します。

症例1

最初の患者さんは、私が漢方に出会ったばかりの頃の患者さんです。当時勤務していた総合病院の婦人科外来に高齢の女性が二人連れで来院されました。二人は仲の良い姉と妹で、ニコニコしながら交代で症状を訴えます。患者さんは姉の方で、80歳代の方です。30年前に卵巣癌の手術を受けてからずっと両足が腫れているということでした。最近特にひどく腫れて痛くて歩けない、と言われます。診ると両足とも大腿部から足まで全体に腫脹しており、皮膚は象皮状態です。蜂窩織炎にはなっていませんでした。最初はどのようにあげようもない状態と思いながら利尿剤の服用を勧めたところ、以前内科から処方されて服

用したけれど、1時間毎に排尿があってトイレに駆け込まねばならず、とても続けられなかった、と言われました。

どうしようかと考えていた時に、ふと高山宏世先生の赤本『漢方常用処方解説』の中と同じような足の腫れた女の人の絵がついていたことを思い出し、適応症に浮腫もあることから防己黄耆湯を処方してみました。私としてはあまり効果に期待をしていたわけではないのですが、臨床の現場で何もできずに患者さんを帰すというのはなかなか心苦しく、とりあえず薬を出してみた、というのが当時の本音でした。

ところが2週間後にお二人で来院され「とっても楽になった」と大変喜ばれました。「ほら、先生足に皺が出てきた」と言われます。確かにパンパンに腫っていた皮膚がたるんで細かい皺が表面に出ています。利尿剤のようにトイレに頻回に行くこともなかったと言われました。その後もお薬がなくなる度に二人で処方を受けにみえます。足が手術前のように細くなるわけではありません。相変わらず腫れた状態なのですが、痛まなくなったし、曲がるようになった、動けるようになったと喜ばれます。

後に妹さんが私に話された事ですが、初診の頃の患者さんは足の腫れと痛みで毎日動くことができず、コタツで1日中ゴロゴロするばかり、いよいよ駄目かなと思っていたのだそうです。「先生、駄目元と思って30年前に卵巣癌の手術を受けたこの病院に来たんです。漢方を服用するようになって本当に姉さんの生活が変わりました。この前なんか自分から進んで同窓会に出かけて行ったんですよ」と言われました。

この方は漢方を学び始めてあまり間のない頃の患者さんでしたが、それまでなんとなく効くのかしらと思っていた漢方薬に対して認識を改めることになった初めての経験でしたし、患者さんに大変喜ばれて強く印象に残った症例でもありました。

症例2

次にご紹介する患者さんは昨年経験した方です。患者さんは30歳代、身長156cm、体重57kgの中肉中背の女性です。卵巣癌で子宮全摘出術、両側付属器摘出術、骨盤および傍大動脈のリンパ節郭清を受けて、術後15日目でした。黄色い帯下が大量に出て困ると訴えて外来を受診されました。腔内を観察すると腔断端からリンパ液と思われる黄色透明の液体が流れ出てきます。そして液体は見ているうちに腔内にたまってきます。患者さんは生理用ナプキンでは間に合わないので尿漏れパンツを履いているということでした。経腔超音波で見るとお腹の中に液体の貯留を認めました。

患者さんに、リンパ郭清を受けたことでリンパ液が灌流できず腹腔内たまっていること、それが術後間もないために腔断端から流出していることを説明して、体の中の水分のバランスが良くなるから、と話して五苓散を処方しました。服薬開始後3日ほどで腔からリンパ液流出は止まり、その後腔からの液体の流出はなく腹部膨満感も消失しました。処方1週間後の診察では、腔断端からの液体流出はなく、経腔超音波でも腹水を認めませんでした。この方は現在術後1年になりますが、その後は帯下の増加や腹部膨満などを訴えられ

ることはなく、腹水の貯留を認めることもなく経過しています。

考察

漢方では病因を捉える理論の一つに「気血水」の異常というものがあります。その中で「水」は体液成分を表すものです。今回取上げた 2 人の患者さんは、婦人科悪性腫瘍手術後に水の異常を起こしたものです。

症例 1 の下肢浮腫は婦人科悪性腫瘍術後にしばしばみかける症状の一つです。治療は発症予防が第一とされ、下肢マッサージや弾性ストッキングを用いた下肢圧迫等が勧められます。しかし、一旦発症してしまうとなかなか根治は望めません。フロセミド投与やワルファリン投与を行うこともあります。蜂窩織炎を起こせば抗菌薬を投与します。近年はリンパ管静脈吻合手術も試みられています。

防已黄耆湯は『金匱要略』が原典です。『外台』の防已黄耆湯は風水を治す。脈浮たるは表に在りとなす。其の人或いは頭汗出でて表に他病なし。病者ただ下重く腰より以上和を為し、腰以下当に腫して陰に及ぶべく、以て屈伸し難し」と書かれています。下半身ばかり腫れて上半身に異常がない、という状態はまさに術後下肢浮腫と同じ状態です。

術後リンパ浮腫に試みる漢方処方、牛車腎気丸、柴苓湯などの報告をみますが、防已黄耆湯もよい適応だと思います。他の方剤との使い分けは水太り体質の肥満や汗かき傾向のある人にはこの処方をすれば良いと思います。いずれの方剤も漢方処方だけで足の状態が完治するわけではありません。このことは投薬前に患者さんによく説明しておきます。しかし、浮腫が軽減し痛みや可動性が良くなること、副作用が少なく長期に投与しやすいことなど漢方の利点は多いと思います。

二人目の患者さんの五苓散は『傷寒論』に記載のある方剤で「太陽病、発汗してのち、大いに汗出で（一中略一）若し脈浮、小便不利、微熱して、消渴するものは五苓散これを主る」とあります。古典での効能は感染症に関連付けて書かれています。現在の保険適応は「浮腫、ネフローゼ、二日酔い、急性胃腸カタル、下痢、悪心、嘔吐、めまい、胃内停水、頭痛、尿毒症、暑気あたり、糖尿病」となっていて、ほぼ全身の水滞に効果がある製剤です。

近年、薬理作用の研究が進み、五苓散は体内に広く分布する水チャンネル、アクアポリンに作用しているという研究成果が報告されています。アクアポリンは細胞膜に存在し、広く全身に分布しています。脳外科領域では慢性硬膜下血腫や脳浮腫の症例に五苓散を使用して著効したという報告がされています。私が紹介した二人目の患者さんは腹部の水滞に著効したわけですが、この症例以外にも術直後の腹腔内リンパ液貯留に五苓散が著効した場合をいくつか経験しています。婦人科悪性腫瘍の手術でリンパ液の流れを人工的に破壊し、さらに開腹術という組織炎症を起こした状態で五苓散がどのように作用しているのか、大変興味のあるところです。